彩

私と患者のエピソード
～薬剤師（医療事務）の立場から～

思いがけずかかってきた患者さんからの電話

仕事帰りの車中で、久しぶりに見る患者さんからの電話が鳴った。
ただ、ご本人ではなく奥様からだった。
先日夫がなくなり、携帯を片付けようとしていたら私の名前をみつけ、思わずかけてしまった、と。
約 16 年前まで勤めていた一般病院で、患者友の会を立ち上げ、そこにご夫婦で参加してもらっていた患者さんだった。患者さんに会長をお願いした年もあり、医師・看護師・管理栄養士・臨床検査技師・理学療法士・事務員、そして事務局と会計の薬剤師の私らが運営をしていた。
病院の承認を得ていたので、平日の時間内に友の会交流会で勉強会をしたり、料理をしたり、週末にはウォーキングを企画したりと楽しい時間を共有する会だった。
その患者さんは、初期からの会員で、こちらも色々と頼ることもあった。奥様と一緒に参加され、病気の療養にも前向きに取り組めていたのではないかと勝手ながら感じていた。
その病院が閉院したことで、友の会は解散を余儀なくされ、患者さんともスタッフとも散り散りバラバラになってしまった。
電話の声は、落胆した様子ではあったが、どこか当時を思い出す活気にあふれた口調でもあり、この間のお二人の生活を垣間見ることができた。
病気のこと、生活のこと、サービス利用のこと、タバコのこと、急ではあったが亡くなった時のこと、その日が患者さんの誕生日！だったこと、私が今どこで何をしているか（薬局薬剤師をしています）の気遣いなど約 25 分、道路わきの空き地に車を停めての電話で正解だった。
思わずかけてくれたことが嬉しく、その晩には当時のスタッフに「あの頃やっていたことは間違ってなかった」的な連絡を取りました。
ある看護師からは、その患者さんと同い年らしく、微妙な返事がありました。
管理栄養士からは「お若いのに、残念ですね」と返事がありました。
別の看護師からは「連絡くれて嬉しいですよね。こういった患者さん、その家族からお言葉貰うと、頑張らないといけないなと思いますね！」と返事をもらいました。
ある年の「ウォーキング」の何十枚の写真を眺めながら、感慨にふけり、想いに浸り、当時のことを色々思い出したり、この患者さん今ごろ元気かなぁとか、連れて行った娘も小っちゃかったなぁとか、あの先生今どこにいるんだろうとか、思考や妄想が止まりませんでした。
思いがけずとはこのことか、くらいの驚きと喜びと感慨にふけったひと夏でした。

お名前・ペンネーム　西永　尚典